

あるいはこんなありふれ職業

壬生咲夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数々のありふれ職業を読んで何となく思いついたSSです。
よければどうぞ…

目次

未来の僕と天之河君と		1
未来の僕と天之河君と	②	5
未来の僕と天之河君と	③	8
未来の僕と天之河君と	④	12
未来の僕と天之河君と	⑤	21
未来の僕と天之河君と	☒	27

未来の僕と天之河君と

昼休み、クラスで昼食を取っていると突然天之河君を中心に魔法陣の様なモノが広がり白い光に包まれ気付けば石畳の神殿の様な場所に居た。

辺りを見渡せばクラスメイトや神官職の様な人たち、そして………
「いい加減巻き込むのやめろっつてんだろうが!!」

「すまない！ 本当にすまない!! けど、今回ばかりは速攻で終わらせて帰りたいんだ」

なんか若干見覚えのある人たちが居た。

「だから手伝ってくれ南雲!!」

「ぎげんな天之河!!」

あははは、あの若干見覚えのある人たち、天之河と南雲っていうんだ。

僕や天之河君と同じ名字なんだくぐくぜくん

はあああああああああああ
!!!!?????

あれからしばらく、どうやらあの見覚えのある二人はどうやら未来の僕と天之河君らしい。

天之河君（未来）は何と言うか今と違って苦労人ぽく見えるけど、僕に関しては白髪に眼帯片腕義手と中二要素満載で正直見えていて恥ずかしい／＼

白崎さんや園部さんを筆頭にチラチラと今の僕と未来の僕を見比べて居たたまれない。

そんな中天之河君（今）と愛ちゃん先生が未来の二人に色々な質問を投げかけていた。

「聞かせてほしい。俺たちはこの世界を無事救う事が出来たのか？」

「…………ああ、救った救った。超救った。なあ天之河君？」

「すまない、本当に悪かったから今この場過去のトータスでその話を掘り返さないでくれ!!」

天之河君（未来）が未来の僕に平謝りするという今の僕と天之河君とでは信じられない光景だ。

未来でいったい何があったんだろう？

そんな中、天之河君（未来）が何やら思いつめた表情を浮かべ意を決したように立ち上がり天之河君（現在）に近づき

「ッ待て天之河（未来）!! お前、まさか…」

「止めないでくれ南雲（未来）!! 例え未来が変わろうともどうしてもこれだけは伝えなければならんだ……」

未来の僕が天之河君（未来）を制止しようとするけど天之河君（未来）の想いを汲み取って口を閉じた。

「いいか、良く聞くんだけ昔の俺!!」
天之河光輝

「は、はいっ!!!」

これからどんな未来を告げられる飲んだろう。

自然と僕たちは唾を飲み込み、天之河君（未来）の言葉を待った。

「お前の、お前の未来は……………無職だ」

天之河君（未来）の言っている意味がわからなかった。

えっと…無職？ あの成績優秀、剣道の大会では優勝する程の天之

河君が無職？

「落ちついて聞いてほしい。俺は時折異世界に召喚されては世界を救ってきた。

「世界を救う」。これだけを聞くなれば素晴らしいと思うだろう。だが、よく考えてほしい。時折異世界召喚される。んだ。

これがどういう意味がわかるか？ わからないか…なら答えよう。短期間から長期間にかけて行方不明の期間があるということだ!!

さて、そんな人間にまともな職があると思うか？ 否、無い、ある

わけがない!!　つまり、無職だ!!　天之河光輝の未来は無職なんだ!!!」

「ガハッ!」

天之河君に1,000のダイレクトアタック!

天之河君は吐血を吐いた。

「世界救済直後にまた異世界召喚も偶にある!

勇者を辞めても最終学歴は中卒だから元の世界ではまともな職に就けない!

こつちの世界で働こうにも突然居なくなつては長い間音信不通になるからどんな職に着いても戻つて着てたら当然解雇!

冒険ギルドに登録しても異世界から帰つて来たらランク降格や登録抹消なんてザラ!!」

「ギガッ!」

天之河君に10,000のダイレクトアタック!

天之河君は机に蹲っている!!

「世界を救つて家に帰れば子供たちに『:初めまして』や『おじちゃん、だくれ?』って言われるんだ!!!

奥さんたちからは『お帰りなさい』の次に『で、新しいお嫁さんは何処かしら?』って聞かれるんだ!!!

『家族』をテーマにした作文で奥お母さんたちの事は書かれても俺父親の事は書かれないか一行で終わるんだ!!!

実の妹から冷めた目で「いい加減定職に着けよ墮兄」って見られるんだ!!

両親からは「五体満足で安心したわ〜」って気を使われるんだ!!

幼馴染からは「お姉ちゃん、弟がそんなふしだらな子に育つて悲しいわ」や「……その頑張つて!!」って言われるんだ!!」

「グフッ!?!?」

天之河君に100,000のダイレクトアタック!

天之河君は死に体だつ!!

「世界を救うたびに王女様や巫女、神様に求婚されるようになるんだ

!!

所持持ちと言つてもアプローチされたり、媚薬を盛られたり、性的に襲われたり、監禁されたりするんだ!!

素で逃げたり異世界召喚されて逃げたりすると病んで追いかけるようになるんだ!!

そのうち最初の妻たちが序列を作ったり、性活のスケジュールを組んだりするようになるんだ!!

なあ、天之河光輝の俺。

家事も仕事も近所付き合いも全部結婚相手がやってくれて自分は定職も着かずふらふらしている人間を世間一般で何て言うか知ってるか?

H・I・M・Oだ。

どんなに世界を救つても、救つた世界の人々から英雄の様に崇められても救つた世界の人々に感謝されても元の世界に戻ったらふらふらしているヒモなんだああああああ!!!!
「ゲファツツ?!!」

天之河君に1,000,000,000のダイレクトアタック!

おっと!? 天之河君の口から何やら魂の様なモノが……

!!
「天之河俺光輝の未来はヒモって決まってるんだよおおおおお!!」

「もうよせ天之河（未来）!! お前の想いはもう十分わかった!!」

「な、南雲（未来）……なら、この勇者呪の資格を如何にかしてくれるか?」

「いや、それについては遠藤の影の薄さが解決できないのと同じだ。諦めろ」

「ゴフツツ?!!?」

ダブル天之河君以外にも被弾者が!!?!!?

死者? 重傷者? とりあえず3名の行動不能者が現れる中、何とも言えない空気に包まれた僕らでした。

未来の僕と天之河君と ②

前話^あ後の話をしよう。

ダブル天之河君と巻き添えで遠藤君が倒れたので会議^{話合}は一旦お開きになったんだ。

今日は異世界召喚やら未来の自分やらで疲れてるから明日また話し合おうってことで。

そして次の日。

「やあ、南雲（今）。一緒にこの世界を救うために頑張ろうな！」

再起不能と思われてた天之河君（今）が復活した。

周りの話を聞くに八重樫さんがひたすら説得と慰めをし続けた結果、

「そうだ未来は変えられるんだ!!」

と八重樫さんの朝食と昼食と精神力と美容とストレスを犠牲に復活してみたみたい。

「……そうだな。未来は変えられる」

「天之河（今）の天職が『勇者』じゃなかったらな」

「っ!？」

「でも、もし万が一……億が一に昔の俺の天職が勇者じゃなかったら……」

「その場合は他のクラスメイトの誰かって事になるじゃね？」

「「「っ!?!?!」」」

「!!」

「良かったああああ『勇者』じゃないっ!!」

「ふう……『暗殺者』か」

「優花くあたし『操鞭師』だったああっ!!」

「私は『氷術師』い!!」

「二人とも良かったあ…私は『投術師』だったわ」

「〃曲刀師〃かあく曲刀つてなに？」

「…〃闇術師〃」

「ツチ、〃軽戦士〃か…：まあ〃勇者〃よりましか」

「〃炎術師〃」、「〃風術師〃」、「〃槍術師〃」

今、僕たちの間で「勇者じゃない！ 良かったー!!!」ブームが来ている。

騎士団長メルドさんが持ってきてくれたプレートを恐る恐る表示しては天職が〃勇者〃でないことに皆喜びの声を上げている。

イシユタルさんを始め教会の人たちや国の上層部はあまり良い顔はしてないけれど、こればっかしは譲れない。

だって、勇者〃無職の未来だからね。

だから僕の天職ありふが、錬成れた師職業で低無能ステータス烙印で見下されたり、鼻で笑われても気にしないよ。

勇者無職よりマシだもん。

さて、肝心の天之河君はというと――、

「勇者じゃありませんように勇者じゃありませんように勇者じゃありませんように勇者じゃありませんように勇者じゃありませんように」

次々と「勇者じゃない」という声にどんどん顔を強張らせ、今や受験・就活生並みに祈りを…：いや、もうこれ誰かを呪ってるレベルで念じてるよね。

「どうかお願いします!! 勇者じゃありませんようにいつ!!!」

【天之河光輝 天職：勇者】

「なんでだああああああああああ!!!」
「ざまあああwww」

「ようこそ無職の世界へwww」

…：案外仲良さそうだね未来の僕ら。

「あ~~~~、その………凄じやないか!! まだレベル1なのにこのステータス a11100とは、流石は勇者!! 将来がたn、……ゴホン、俺のステータスなんてあつという間に追いつかず!!」

メルドさん、僕のステータスをありふれた職業を引いた時以上に気を使ってるよ。

全然気にしないけどね☆

未来の僕と天之河君と ③

前回までのあらすじ

「勇者じゃありませんようにっ!!!」

【天職：勇者^{無職}】

「なんでだああああああああ!!!」

「ハ、ハハ…勇者^{無職}、俺が勇者^{無職}？」

「光輝!? しっかりして光輝!!」

「しっかりしろ光輝!!」

「その、光輝君元気出して!!」

天之河君が駄目之河君モードに突入。

慌てて八重樫さんたちが元気つけようと奮闘し続けるけど効果は見られない。

まあ…自分の未来が無職なヒモ野郎に確定したらああもなるよね。

「見ろよ天之河（未来）、数十年前に世界を救うのに疲れきって引き籠った姿にそっくりだぜ」

「ああ、当時の俺はあんな感じだったんだな。…思い返してみれば、当時の俺って相当屑だったよな」

「まあ事情が事情だから解らなくはないがハッキリ言っとうしようもない屑だな」

「…南雲（未来^君）に屑って言われるのは中々くるものがあるな」

「事実だろ？ 何しろ雫が鬼の形相を浮かべて天之河（未来^前）をボコボコにしたんだからな」

え？

「「「「え？」」」」

「「「「はあああああああああ!!!?????」」」」

「ふえっ!? わ、私が南雲君と／＼!／＼!」

「……雫ちゃん、どういふことカナ?!?!」 カナア?」

「ヒイツ!?! し、知らない。私、知らない!!」

何で!?! どうして!?! 何があつて僕と八重樫さんとけ、結婚を!?

「落ち着け昔の俺」

落ち着いて居られるわけkー

「雫は側室で本命は別にいる」

何やってるの未来の僕つ!?!?!!

「……色々あつたんだよ」

「そうだな。色々あつて本命の子が居るのに人の可愛い幼馴染sを搔つ攫つたうえにウサミミ美少女とDMなドラゴン姫と元教師と元王女と元人妻未亡人を嫁に迎えたんだよな。あ、あと愛人も作つたんだっけ?」

本当になにやってるの未来のボクウウウウウウウ

ああ、周りの…特に女性陣の視線が痛い。

!!!!????

キモヲタ野郎からクズ野郎だとかGを視るような視線をヒシヒシと感じるよ。

「南雲（今）……」

ねえ、何で天之河君（今）はちよつと嬉しそうな顔をしてるわけ? ちよつとはそこで側室って言われて真っ白になって固まつてる八重樫さんを心配してあげなよ!!

そんなに未来から告げられる黒歴史の被害者仲間が嬉しいかクソ野郎!!

「愛人に関してはお前らが優花をずっと愛人呼ばわりするからいつのまにか本人も愛人枠に納得しちまつたんじゃないか?」

「俺は園部さんを愛人呼ばわりしたことがないぞ。……心の中では思ってたけど」

「私っ!?!」

「優花チャン、ドウイウ事カナ? カナ?」

「ヒイツ?!? 知らない知らない知らない!!!」
いい加減にしてよ!!!

僕がハーレムどころか愛人まで作ってるとかそんな突拍子もない嘘や冗談…

「これ結婚式の写真な」

…:うわあ、綺麗な女性がいっぱいだあ

なんかちよつと見覚えのあるお姫様っぽい人とすごく見覚えのあるクラスのマドンナや先生まで居るよ。

あ、小学生くらの子もいる〜

あ、あはっ

あはははははははははh h——

そこで僕の意識は途切れた。

なお、この後一緒に写真に写っていた小学生くらの子は義娘と聞かされて一安心したところに成長して迫られて一線を越えてしまったとか、その子との初めてが親子丼と聞いて二度目の気絶をすることとなる。

未来の僕と天之河君と ④

トータス三日目の朝。

二度目の気絶から目覚めた僕は訓練前の朝食を取りに食堂に向かい

「今日も一日頑張ろうな南雲（今）！」

爽やかな笑みを浮かべつつ、被害者仲間^{同族}を見る目を浮かべる天之河君の顔面を殴って席に座る。

男子からの射殺さんばかりの視線と女性陣からのクズを視るような視線に胃をキリキリさせながらご飯を食べる。

正直、何を食べて、どんな味がしてたのかなんてわからなかったよ。食後も胃がキリキリして訓練にならなさそうだったから、医療室に寄って処方してもらった薬を飲んでから訓練所に向かうと――

悪魔の様な笑みを浮かべる未来の僕に土下座する檜山君の姿があった。

え、何があったの？

――話は少し前に遡る――

ハジメ以外のクラスメイトは案内に従って訓練室に向かう。

中に入るとメルド団長と未来の天之河何やら話し込んでいるようだ。

とりあえず、話が終わるのを待っているとふと、一人足りないことに気づいた。

クラスの何人かがどこだろうとあたりを見渡すと、壁際で訓練室に似合わない高価な椅子に偉そうな姿勢で座る未来の南雲の姿があった。

しかも従者っぽい人を隣に添えて、これまた高級そうな扇で風を仰いでもらっている。

皆が啞然としてみると、自殺志望者^{檜山}が未来の南雲へと噛みついた。それは異世界に来る前から苛めてた相手が異世界に来てても弱者

だった。なら、未来になってもそれは変わらないだろうと判断の上での行動だったのだろう。

「おうおう、未来の南雲さんよ。随分と偉そうな態度だが何様のつもりだ？」

「……………」

「ビビッて声も出ねえくっつてか変わらずダツセえくなく」

「……………」

「っおい聞いてんのかこの中二やr——」「ああ！ 誰かと思えば檜山じゃねえいか！ 惚れた女が振り向いてくれない&他の男に話しかけるのが気に食わなくて集団で苛めて惚れた娘の好感度を下げた檜山じゃないか!!」——うええええええええ!!?!?——

まさかの精神攻撃にたじろぐ檜山。

「な、なににいつてんだこのヲタやr——」

「実は生徒手帳に惚れた女の写真を忍ばせている檜山じゃないか!」

「ちよ、ま、なんd——」

「自宅の机の引出しに惚れた女に似たグラビア雑誌を隠している檜山じゃないか!!」

「う、ううううそいつてんじゃー」

「トータスこっに来る前に兄貴のツ○ヤカードで借りた○Vの延滞料金がヤバイことになってた檜山じゃないか!」

「ち、ちが、出鱈目w——」

「事故に見せかけて邪魔な男を崖から突き落として殺そうとしたり、惚れた女が手に入らないなら自分の手で殺して傀儡人形ゾンビモドキにしてもらって身体だけでも自分のものにしてまで叶えたかったのがお手で繋いで遊園地デートの檜山君じゃないか! で? 俺に何か用か?」

「サーセンシタアアアア」

これ以上、未来と現在の黒歴史の暴露を恐れてか檜山が土下座で謝罪した。

「そ、そんなことがあったんだ。」

「全く、人の弱みにつけこむなんて最低だぞ!!」

本音を隠しきれてないよ未来の天之河君。

「いったい、未来で何があつてあんなにも変わったんだらう？」

「トータスに来る前までの天之河君とはまるで別人みたい。」

そんな事を考えていると、話し終えたメルド団長から訓練を始める声がかかった。

これから戦争に向けての訓練が始まる。

気を引き締めようとした僕らに待ったの声をかける人がいた。

「よろしいですかメルド団長」

「む？ 訓練場ごんな場所にどうされましたかイシユタル殿」

「未来のお二方のお話を聞きたいとエヒト神様からの信託がありました」

「む、それは…」

「ええ、これは大変名誉ある事です。さ、未来のお二方、こちらへ。エヒト神様がお待ちです」

何やら雲行きが怪しくなってきた。

僕たちを呼び出した際には現れなかったエヒト神が今になって姿を現し、かつ未来の二人に会いたいだって？

それにイシユタルさんやその周りに人達も何かおかしい。

「断る。話が聞きたけりやてめえが来い。そう伝えとけ」

「それは困りましたね。エヒト神様は特定の場所にしか降臨できず、また大変多忙なお方なのです。どうか、来てくださりませんか？」

「ハッ、ヤダね。ずっと部屋ニに引きこもって見物じゃしてるなよクソジジイ」

「つゝ…では、未来の天之河様だけでも…」

「すみません、イシユタルさん。南雲（未来）の口はちよつと悪すぎるけど、俺も概ね同意見です」

「……そうですかそうですか。では、お二人ともエヒト神様からのお言葉に逆らう。そう認識されてもよろしいのですね？」

「ああ！」

「だったら何だつてんだ」

「力づくで従つてもらうだけです」

イシユタルさんの合図にそばにいた神官や二階席、柱に隠れていた人たちが一斉に未来の僕らに武器を向け、さらには――

「ん？」

「あん？」

光の束の様なものが未来の僕らを拘束した。

「つイシユタル殿!! これは――」エヒト神様のお言葉は絶対です――
「っ!!!」

啞然とした。

危ない人だとは思っていたけれど、まさかここまで大胆に出るとは
思いもしなかった。

二人を助けなきや。

でも、身体が震えて動かない。

「さ、行きますぞ」

そう言つて踵を返すイシユタルさん

恐怖に震える僕たちだったけど、ふとどこからか笑い声が聞こえて
きた。

いや、そんなこと考えるまでもない。

未来の僕らからだ。

「……気でも狂いましたか？」

「いや、まさかこの程度で俺を拘束できると思っているとはな」^{魔王}

「ああ、この程度なら異世界に行く度によくあることだから慣れつこ
ゃ」

そう言つと、あつさりりと光の帯を砕く未来の二人。

「ば、バカな!! 世界最高峰の拘束術をあつさり」と……」

「さてと、手荒な真似をしてくれたんだ。覚悟はできてんだらうな？」

「っ!?! ええい、何をしているのです。あのエヒト神様に逆らう愚か
者共に鉄槌を下すのです!!」

イシユタルさんの叫びに呆然としてた神官や隠れてた人たちが魔

法陣を展開する。

それらを見てもなお、未来の二人は落ち着いた態度を―ヤレヤレと
いった態度を崩さない。

「さあ、今度こそエヒト神様の元へお連れしますぞ!!」

魔法が二人に放たれる。

その数は優に1000を超えている。

「二人とも逃げろっ!!!」

メルド団長の叫び声もむなしく着弾する数々の魔法。

着弾した魔法により砂煙が舞っていて、二人がどうなったのかはわ
からないけど無事とは思えない。

やがて、砂煙が晴れてきたころ

「……ところでだ」

ふと、声が聞こえた。

「いつから俺が未来の南雲だと思っていた?」

「いつから俺が未来の天之河だと思っていた?」

え?

砂煙が晴れた場所。

そこには二人の男性が居た。

でも、彼は未来の僕らじゃない。

彼らは黒衣を纏っていた。

指ぬきグローブを着用し、

室内なのにサングラスをかけ、

鏡合わせのように心惹かれるポーズを取っていた。

「だ、誰だだ貴様!!!」

「フツ、聞かれたからには答えよう」(サンングラスくいつ入りまゝす)
「我こそは魔王の右腕にしてウサミミ暗殺集団元帥!」(クルつとター
ン入りまゝす)

「疾牙影爪の Kou スケ・E・アビスゲート!!!」(決めポーズ入りまゝ
す)

啞然とした。

そして

「ゴホオツ!!!」

遠藤君が吐血した。

「つどうやらまだお仲間が居たようですねですが——既に貴様らは我
が術中に嵌っている——なんですと?」

「闇魔法 荒ぶる魂のポーズ」

『胸の内に秘める荒ぶる魂を開放せよ!』

さすればその姿に見惚れし者を封じ、闇へと誘うであろう』

……え? なに、その説明文になってない説明は? 意味が解らな
い!!

というかこれって僕たちも巻き込まれてない!? さつきから全く
身体が動かないんですけど!!

心惹かれる格好痛々しいを強制的に見させられてるんですけど!?

ん? まって、Way ちよつとおかしい……。

さつきから僕はあの心惹かれる格好痛々しいを何て……っほら可笑しい!!
これじやまるで…

《や、久しぶりだね僕!!》

出てくるなああ!!! 封印されし BokuuuuUUUUUU!!!

《酷いなくせつかく久しぶりに僕を呼んでくれた言うのに》

呼んでない! 呼んでないからね!!

だから大人しく封印され、この言動もおかしい!!!???

「つ魅了魔法ですか。これほど強力な物は聞いたこともありませんが、恐らくこれには相当な代償が必要なハズです」

「フツ、その通りだそれ相応な代償（主に羞恥心）が必要だ」

「それに見たところあなたも少しも動いていないところから、体制を崩したら解除されるのでは？」

「……だとしたら？」

「外の控えている兵を呼び出すだけです」

「……何か勘違いしてないか教皇殿」

「なんですと？」

「私は一人ではない」

え、うん。確かに目の前に二人居るから一人じゃないよね？

「私はここにも居る」（柱の陰から決めポーズで登場します）

ふあっ!?

「ここにも私が居る」（クラスメイトの中心で髪をふあさつとします）

「そして私はここにも居る」（兵団の中心で片目隠しのポーズ入ります）

次から次へと現れては、隙間なく僕たちに心惹かれる格好を見せてける遠藤君（未来）と

「ゲフツ、ガツ、ゴホツ」

次々現れるたびに心なしか遠藤君（今）の顔が死んでいつてる気がする。

いつそのこと意識を手放して倒れたいだろうけど、魅了&拘束で一歩も動けないから吐血するしかできない。

まさに生き地獄だね!!

かくいう僕も余裕なんてないんだけど!!!

その言葉と共に、何も無い筈の空間から突如扉が現れた。

重々しい扉が開き、中から出てきたのは

「足止めご苦労だ遠藤」

「おかげでスムーズにラスボスを捕まえられたよ」

未来の僕と天之河君。

そして彼らに抱えられ、簀巻きされてる半泣きの幼女。

「さて、お仕置きを始めようか」

彼らの職業は「勇者」、暗殺者、錬成師らしいけど

僕らの目には「ヤクザ」、悪魔、魔王のようにしか見えなかった。

未来の僕と天之河君と ⑤

重々しい扉から出てきた未来の僕と天之河君は、某M○Bみたいなことをイシユタルさん達にした後、僕たちに事情を説明してくれた。

曰く、召喚されたのはエヒト神^{クッソ}の思い付き。

曰く、この世界の悪状況もエヒト神^{クッソ}のせい。

曰く、最終的にエヒト神^{クッソ}は僕たちの世界に侵略し神様遊戯^{暇つぶし}をするつもりだった

曰く、ほつとくと何をしでかすかわからないし、面倒だから速攻で終わらせに行ってきた。

曰く、さっさと故郷に帰りたい。

と、なにやら物語の序盤で終盤あたりの話をされて衝撃を受けるところなんだけど全く頭に入らない。

だって――

「あうっ！ いっつ！！ あっつ！！ んっつ！！」

視界の隅っこで、エヒト神^{幼女}が全自動でお尻ペンペンされてるんだもん。

未来の僕曰く、「手が離せない時に重度なドMの嫁の相手をさせるために作った」らしい。

クラスの女子の僕を見る目が更に冷たくなって僕の胃がキュッとなる。

そのお尻ペンペンされてるエヒト神^{クッソ}だけど、だんだん声の色っぽくなってきて僕たち男子は顔を上げられないし、背筋を伸ばして立つこともできない。

今立ったら僕たちはジ・エンドだ。

「あ、あの話に集中できないんで、その彼女(?)へのお仕置きは一旦やめないか?」

よく言ったむしよk――じゃなかった天之河君!!

「随分と甘いこと言うな昔の天之河。言うならばこいつ^{クッソ}は全ての原因だぞ?」

「それでも女性に、それもこんな小さな子供に手荒な真似を…」

「ああ、それ中身は幼女好きなクソジジイだぞ。好みの幼女が居たら身体を乗っ取ろうとしたり、自分の思い通りにならなかつたら^{一族郎党皆殺し}癩癩を起こす幼女好きな変態だぞ」

え、そうなの？ という僕らの視線が幼女（in エヒト神）に向く

「いっつ!! べ、べつに!! い!! 幼女がすきなっつ!? わけじゃあつ!!!」

「ポチつとな」

「アババババババババババ!!??」

「好きなんだよな?」 !!!

「は、はいいっ! この身体があつ! 大、好きいつ!!」
「だ、そうだ」

爽やかな笑顔を向ける未来の僕。

もう、ドン引きなんですけど!? いったい何があつたらそんな風になるんの!?

うっつ、い、胃があああ……

「何って……無理矢理異世界に呼ばれたと思つたら無能の烙印を押され、非戦闘職なのに何故か戦わされ、ひやmークラスメイトの裏切りで奈落の底に突き落とされ、魔獣の襲撃に何度もあつたうえに腕を食われ、孤独と圧倒的な暴力に心が折れて、復讐心だとか理不尽に対する怒りで色々吹っ切つた結果だが?」

そりゃ性格変わるね!?

あと、檜山君の名前隠しきれないからね!!!

「ついでにばらす南雲ハジメが非戦闘職に^{無能}の^{烙印}低能力だったのは^{クッ神}エヒト曰く、もがき苦しむ姿を見たかつたかららしいぞ」

ドチクシヨウツ!!!??

「…まあ、どうしてもてんなら、席から立って止めに行けばいいだろ?」

「「「「「いえ、このままでもいいです」」」」」」

多少落ち着いたとはいえ、まだまっすぐ立てない僕たち男子の総意だった。

「マスター」

未来の僕らからの話が進むなか（幼女の悲鳴つき）、ふとリンとした声が響いた。

声が出た方を向くと、いつの間にか開いた扉から綺麗な女性が、銀髪に整った顔をしたシスターが歩いてきていた。

「よく来たノイントおっ！?!? 早くっっ!! ごいづを殺せっっ!! 私をっっ!! 助けるっっ!!」
敵っ!!?!?

とっさに身構える僕たちだったが、例のシスター…ノイントさんは僕たちの事は一切気にせず真っすぐ歩いていき

「マスター、城内に居た信者の洗脳の解除及び事情説明を終えました」
「ご苦労」

未来の僕に臣下の礼をとった

「ノイントオッっ！?!?」

まさかの部下の裏切りにエヒト神の驚愕と怒声の声部屋に響く。

「何故だあっ！?!? 何故、裏切ったっ！?!? ノイントオッ！?!?」
「裏切っておりません。今でも私はエヒト^{あな}神^た様を敬愛しております。ただ、^魔こちら^王の方より——」

『敬愛する上司を可愛い幼女にして一生お世話したくないか?』

「——と提案を受けましたので、それを飲んだだけですので誓って裏切っておりません」

「ノイントオッっ！?!?」

世間一般でそれを裏切りっていうんですよ。

この後の出来事は、色々ありすぎたので纏めて話そう。

〈謝罪〉

洗脳やら記憶やらが戻った王国並びに協会のお偉い人たちが慌てて僕らの居る部屋に駆けつけて

「「「この度は、誠に申し訳ありませんでした」」」

一斉に土下座を始めた。

謝罪の内容を簡潔にまとめると『自国の問題を他世界の、それも幼い子供に委ねるとかマジないですよ』といった感じ。

とりあえず、僕たちが帰還するまでの生活と安全と資金の保証、帰還方法の模索を約束してくれた。

〈使徒、襲撃〉

謝罪を受け入れてお偉いさん方が立ち去ろうとしたとき、伝令兵が慌てて駆けつけてきた。

『報告!! 空を覆いつくすような数の銀色の人型が現れました』

その報告に僕らは呆然とし、

「m9(ﾟдﾟ)プギヤー!! 随分とちようしに乗ってくれたなクズ共が!! もうお前らはおしまいだ!! やってしまえ我が子らよ!!」

とエヒト神が吠えた。

けど、

「墜ちろカトンボオオオオオオッ!!!」

「「「ギヤアアアアアアアア!!」」」

「フハハハハッ!!! 見ろ神の使徒がゴミのようだ!!」

万を超える砲門を練成して、空を飛ぶ女性らを撃ち落とす未来の僕と

「ギヤッー?」

「クツ、こいつ速いどころか認識g」

「フハハハッ、手緩い、手緩すぎるぞ神の使徒よ! もっと私を、

深淵^{アビスゲート}卿を本気にさせてみせよ!!」

「今です。対象を槍で串刺しに——「フツ、それは私の残像だ」(敵の背後を取りサンングラスくいつ入りまーす)——貴様あああ!」

「遅い」(クルッとターンからの一閃入りまーす。ポージングに続きまーす)

「あつー」

「深淵にて安らかに眠るといい」(お辞儀入りまーす。香ばしい匂い入りまーす)

「二ゴフツ」

的確に敵を処理しつつ、ちよくちよく一部生徒の心にダメージを与えてくる謎^{アビスゲート}の暗殺者

この2名によってあつさりと鎮圧された。

なお、この時未来の天之河君はエヒト神が逃げ出さないように、聖剣をエヒト神のほほにペチペチ当てながら盛大に煽っていた。

その様子はまさにヤクザ! 顔は爽やかイケメンなのにしてることが完全にヤクザとかマフィア!!!

「ぐはっ!?!」

天之河君の胃にダイレクトダメージ!!!

……胃薬のむ?

〈訓練〉

未来の僕曰く、

「このままお前らを帰還させることはできる。だが、今のお前らのクソ雑魚スペックじゃこの先やってけねえから鍛えてやる」

「だから、選べ」

Aコース

心優しい穏やかな性格な一族を、狂気な笑みを浮かべるムキムキ暗殺集団に変える最短コース

もしかしたら中二病を患うかも？

Bコース

爽やかイケメンによる優しくゆつくりしな長期間コース。
ただし、講師は時折^{勇者召喚にあう}行方不明になるし、野外訓練^{道連れにもあうよ!!}もあるかも!!

Cコース

中二病な暗殺者が分裂しまくって一人一人をみっちり指導する○せんせーコース。

かたぐるしいだけじゃない。ちゃんとした娯楽^{罰ゲーム}もあるよ。

「「さあ、どれにする?」「」」

この選択に僕らは……

〈それから……〉

色々とおったけど、無事に地球へと帰還した僕ら。

再び、平穏な日々を送れる。

そう思っていたのだけれど——

「召喚陣が出たぞ!!!」

「ツチクシヨウ!!!」

「ちよ、おま、こっち来んな天之河!!!!」

「嫌だ!! 南雲も一緒に来てくれ!! お前が頼りなんだ!!!!」

「ふざけんなあああ——」

こうして時折、天之河の召喚に巻き込まれてる。

とりあえず、現地についてら一発ぶん殴ってやる。

今日もそう誓うのであった。

未来の僕と天之河君と ☒

◆ 帰還前に…

学校の昼休みに突如「トータス」に召喚された僕たち。

召喚された理由は『魔人族に攻められこまれてピンチだかれ救ってほしい』といったものだった。

けど、それは未来の僕と天之河君と遠藤君の手により僕らの^{未来の}黒^{歴史}史多大な犠牲を支払うことによつて黒幕が^{エヒト}捕縛され、敵対勢力も撃退か懐柔かでほぼ壊滅。

洗脳されてた各陣営の首脳陣も解放されたので僕たちはもう帰るだけかな。

……………そう思っていた時期がありました。

「これで帰れると思ったか？ ハッ、残念だったな！」

「今から君たちに地獄の特訓を受けてもらう！」

「口を開く前と後に「サー」を付けたまえ」

未来の僕たちからの強制特訓の指示に僕らは大反対した。

「ふざけるな！　なんでそんなことしなくちやならないんだ！」

「もうこつちの問題は解決したんだから帰りたい！」

「帰れる手段があるんだからさっさと帰りたい！」

「この中二野郎!!」

「ナルシスト共!!」

と数々の大ブーイングが流れる中、未来の僕が口にした。

「本当にいいのか？　初期ステータスのまま帰って本当にいいのか？」

え、なにその不穏な言い方？

「……………いいか、これはあくまで俺たちが実際に体験したことだが…………」

未来の僕曰く、

このまま帰ったとして、必ずまた天之河君の異世界召喚に巻き込まれる。

自分だけは巻き込まれない!! なくんてことは無い。絶対に巻き込まれる。

パターンとして

①率先して巻き込むパターン

これは将来的に『どこでもドアモドキを作れる』僕と戦闘力も高く分裂して高速で情報収集に当たれる遠藤君はよくやられるらしい。

②たまたま居合わせて巻き込まれるパターン

たまたま近くに居たり、街中でバツタリ出くわしたと思ったら異世界召喚に巻き込まれるらしい。

③知らぬ間に巻き込まれてたパターン

住み慣れた・生まれ過ぎした街を遠く離れて暮らしたけど、家族サービスとかでたまたま訪れた天之河君に気づかず巻き込まれるらしい。

④不意打ちで巻き込まれるパターン

異世界トータルに居るはずの天之河が突如目の前に現れたと思いきや、『あ、ゴメン転移先間違えちゃった 今度こそちゃんと送るね♪』と連続で召喚陣が現れて連れ去られるらしい。

⑤諦め・逃げるなんてムリポ!

召喚陣の範囲が滅茶苦茶広くて巻き添えから逃げられない。なので、召喚先がまともなものを祈ったり、家族や身内にメッセージを残したりするらしい。

え、ウソだよね? という僕らの視線がよく巻き込まれるもう一人の被害者へと向かう。

「フツ、大体一人あたり平均2回は巻き込まれ、私と魔王は2桁は余裕だ」

「最近は召喚先に着いたら皆、右の頬を遠慮なく殴ってくるよ……」
「その後、左の頬も遠慮なくぶん殴るよな!!」

「アッハハハハハハ!!」

疲れてるともイカレテルともとれる笑い声をあげる未来の僕らの姿に僕たちは絶望した。

とりあえず僕らは現在の天の河君から距離を取り、居合わせた警備兵や王国の人たちも現在の天の河君から距離をとった。

現在の天之河君は涙目だが知ったことか!

こうして僕らは後の事を考え、このまま帰還せずに未来の僕らの特訓を受けることにした。

だけどもさか、あんな地獄の特訓が待ち受けているとは思いもしなかった……。

◆呼び方

「いい加減、未来の○○だとか現在の○○って面倒だな」

「フツ、本来なら作中に描くつもりが作者も忘れてたから仕方がない」

「メタな発言は止めような遠藤」

「とりあえず現在の俺らの事はそのまま(苗字&名前呼び)で、俺らは別の呼び方にするか」

「なら、未来の南雲君の事はえ、魔王とかマジ中二で」

「なら、未来の天之河テメエはフツ…勇者つてお前wwwwだな」

「あゝあゝあゝあゝっ!!??」

二人が盛大な殴り合いを始めた為、話し合いは中断。

なお、忘れ去られた未来の遠藤は当人不在の内に闇に潜みし狩人に決められ、後で三人による盛大な殴り合いによって王国の訓練施設が大破した。

でも次の日には三人の手によって破壊以前の状態(オタク知識を詰め込んだ魔改造施設)で復活したとか……。